

中世のサケ漁遺跡



発掘の様子(地下2m)

7月、8月の2カ月間、花川南5条橋のたもとで遺跡の発掘をしました。遺跡は紅葉山52号遺跡とK483遺跡といえます。遺跡の年代は西暦1570年を中心とするもので、この年代に流れていた古い発寒川の河道の中に残されていました。

この川では江戸時代からサケ漁が盛んに行われていたことが知られています。今回の発掘で、それより古い時代のサケ漁の跡が見つかりました。その跡は川を斜めに横断する杭列と、それに掛ける簾状の柵の組み合わせでできていました。これはアイヌ民族が行っていた伝統的サケ漁の「テシ」と同じ形式の仕掛けです。「テシ」とは「止めるもの」という意味で、遡上してくるサケを止めて、鋸で突く、棒で叩くなどで捕獲しました。発掘で鋸は見えませんが、長さ30cmほどの鉄の棒を折り曲げ、木の柄に付けた鉤が出土しました。この鉤でサケを引っ掛けて

捕獲していたのでしょう。石狩市付近に和人が進出したのは西暦1600年より新しい時期と考えられますから、遺跡はアイヌ民族が残したものと見てよいでしょう。

アイヌ民族は西暦13世紀以降、現在知られている文化を持つたと言われていますが、実のところ18世紀以前の遺跡や資料が少なく正確なことは分かっていません。ですからこの遺跡は、アイヌ民族の古い文化を知る上で手がかりとなる重要な遺跡ということが出来ます。現在出土品を整理中ですが、杭や鉤のほか、動物を毒矢で捕る仕掛け弓の一部、カンジキ、椀、曲物などの多彩な生活用具も確認されています。

なお、調査の詳しい成果は11月に市民図書館である「石狩大学博物館」(広報いしかり10月号19ページ参照)でお話する予定です。

(石橋孝夫)



木柄が付いた鉄製の鉤(柄の長さ90cm)



川底に打ち込まれた杭列

■文化財課・いしかり砂丘の風資料館
☎62-3711
✉bunkazaih@city.ishikari.hokkaido.jp